

C. S. ルイスと J. R. R. トールキン ——信仰と作品——

C.S.Lewis and J.R.R.Tolkien —— Faith and Works

棚 瀬 江里哉

Eriya Tanase

ABSTRACT

C.S.Lewis and J.R.R.Tolkien, two of the greatest figures in modern English fantasy, were also good friends and devout Christians. This paper compares them, with the focus on how their faith relates to the world depicted in their works, Lewis's Narnia and Tolkien's Middle-Earth.

Key Words: C.S.Lewis; J.R.R.Tolkien; Christian; Fantasy

1. はじめに

C. S. ルイスと J. R. R. トールキンは共通点を数多く持っている。友人同士であり、ともに敬虔なクリスチャンであった。二人とも「インクルングス」という、オックスフォード大学の学者を中心とした一種の文芸サロンの中心的なメンバーであった。ここで二人は他の仲間とともに、作品を発表する前の草稿を読み合い、批評し合い励まし合った。その大きな結実として現代イギリスを代表するファンタジー文学作品が生まれてきた。また、作品以外に、文学者として二人とも妖精物語論を書いている。妖精物語とは広くファンタジーとも言い換えられる。両者がこのテーマをどう捉えていたのかが伺われ興味深いと同時に、それぞれの実作品を考える上でも多くの示唆を与えてくれる。さらには、作品の前書き、伝記、書簡集などを手がかりに両者を比較し、作家と作品と信仰というテーマを検討してゆく。上記以外にも共通点は多いのだが(棚瀬, 1994: 30参照)、本稿ではそれぞれのキリスト教信仰と作品世界の成り立ちの関わりに焦点を当ててみたい。

2. C. S. ルイスのナルニア

ルイスのファンタジー作品はナルニア国物語

全7冊である。イギリスの少年少女達が別世界ナルニアに行き、そこで様々な善と悪の戦いに巻き込まれる。7冊はそれぞれ独立した冒険ファンタジーでもあるのだが、まとめてChronicles of Narnia (ナルニア国年代記)とも呼ばれるのが示すとおり、全体としてつながりがある、壮大なスケールのナルニアについてのストーリーともなっている。発表順に七作を並べると、『ライオンと魔女』(1950)、『カスピアン王子のつるぶえ』(1951)、『朝びらき丸 東の海へ』(1952)、『銀のいす』(1953)、『馬と少年』(1954)、『魔術師のおい』(1955)、『さいごの戦い』(1956)、となる。この出版順とナルニア国の年代順は実はかなり大幅に食い違っており、このことは様々な論議を呼んできたのだが、本稿ではふれないでおく。ただし、最後から二つ目『魔術師のおい』が年代順では一番目でナルニアの誕生を描き、最後の『さいごの戦い』は年代順でも文字通りナルニアの最後を描いている。この両作品は作品世界の成り立ちと特に関係が深い。

ナルニア世界とキリスト教には明白なつながりがあるというのは多くの人が述べていることである。その結びつきの中心にあるのが、ライオンの姿の王にしてナルニア世界の造り主、善

と悪の戦いにおいて善を体現するアスランである。アスランを中心としたナルニアとキリスト教の代表的な結びつきを挙げておくと、あがないによる罪の救い（『ライオンと魔女』）、天地創造（『魔術師のおい』）、最後の審判（『さいごの戦い』）などがある（棚瀬，1994：30-31参照）。さらに、「こういうテーマを読みとることも可能である」という以上の、ほとんど直接に近い結びつきが『朝びらき丸 東の海へ』のラストに見られる。主人公の少年少女達は子羊に出会う。子羊はアスランの国への道をたずねた主人公達に、「わたしの国へ来る道は、あらゆる世界から通じている」と言うと同時にライオンの姿のアスランに変わり、二人はナルニアに戻ることはないと告げる。少女がアスランと会えなくなることを嘆くと「あなたがたの世界」でもわたしに会うとアスランは予告する。そしてアスランの最後のメッセージは「... あちらの世界では、わたしは、ほかの名前をもって。あなたがたは、その名でわたしをわかるように、おぼえていかなければならない。そこにこそ、あなたがたがナルニアにつれてこられたほんとうのわけがあるのだ。ここですくはわたしのことを知ってくれば、あちらでは、もっとよくわかってくれるかもしれないからね。」（ルイス，1966：300-303（瀬田貞二訳））であった。別世界ナルニアのアスランと、現実世界のイエス・キリストが直接結びつけられているのはほとんど明らかと思われる。

3. トールキンの中つ国

トールキンのファンタジー作品の中心は「中つ国」を舞台としたもの（『ホビット』（1937）、『指輪物語』（1954-5）、『シルマリオン』（1977）の三作）である。これはこの世との行き来はない、全くの別世界で、エルフ、ドワーフ、人間、ホビットなどの種族が主に活躍する。やはり善悪の戦いが主要なテーマとなってい

る。『ホビット』もすぐれた児童ファンタジーであるが、中つ国ものの中心となるのは『指輪物語』であろう。ホビット族の主人公フロドは、中つ国をわがものにしようとする巨大な悪の力、魔王サウロンの力の指輪を消滅させるという恐るべき使命を、想像を絶する苦難の果てに達成するという内容で、形としては『ホビット』の続編であるが、はるかにスケールが大きく、深くなっている。注目すべきは、最終的にはサウロンは滅ぼされるのだが、全編を通じて、善と悪の戦いにおいて力としてはサウロンの悪の力の方が強いとされていることである。何より、ナルニアのアスランにあたるような究極の力強い善なる存在がない。

ここで『シルマリオン』に目を転じてみることにする。出版順は最後、しかも死後出版である。ところが実は、この作品は『ホビット』より前に、というよりはるか以前の1917頃から構想され、断片的に書き進められてきた壮大な、トールキン独自の神話体系であり、一生かけてまとめようとしてまとめきれず、結局死後、息子クリストファーが編集して出版に至ったという曰く付きのものなのである。さらに、『ホビット』も『指輪物語』もその神話体系の一部であり、『シルマリオン』は『指輪物語』の登場人物達がはるかに思い起こす、中つ国の遠い遠い神代の物語、まさしく神話ということになっている。ただし、中つ国においては、この神話は実際に起きたこと、歴史でもある。すなわち、神話であると同時に古代史でもあるわけで、さらには特にエルフは不死の部族なので、神話（『シルマリオン』）の登場人物の一部はずっと命を保ち、現在（『指輪物語』）にも登場してくる、ということも生じている。

作品世界の成り立ちという点から特に注目すべきなのは『シルマリオン』に描かれている天地創造の物語である。中つ国を形作ったのはヴァラールと呼ばれる複数の神的存在だったの

だが、さらに、ヴァラール達自身を、また宇宙全体を創造したのはエルー、別名 the One と呼ばれる至上神だった。このエルーはキリスト教の神と重ねることができる存在であろう。ヴァラール、そして究極的には、最高神エルーが大いなる善の力だったのである(棚瀬, 1994: 32参照)。こういう背景をふまえた上で『指輪物語』を読み返すと、ビルボというホビットは指輪を見つけることになっていた (be meant, 意図されていた) とか、フロドは指輪所持者として選ばれた、などという箇所が意味を持ってくる。すなわち、「意図し」「選んだ」のは誰か、ということである。そして最も重要なのが『指輪物語』において善の側を代表する人物 (ただしサウロンに対抗できるほどの力はない) ガンダルフは「つかわされてきた」とある。『シルマリオン』を読めば、「つかわした」のはヴァラールだったということがわかる。さらに、『指輪物語』の新版では補遺が付け加わったのだが、その中の過去の歴史に一言だけ、the One への言及がある。ただし、これらの例はいわばそのつもりで探すから、見つかる、あるいは意味を持ってくるのであって、普通に読んでいたらとてもわからないであろう。エルーもヴァラールも作品本体内では直接の言及はない。すなわち、『指輪物語』自体ではキリスト教はほとんど見えないようなかすかな底流にしか過ぎない。

4. クリスチャン作家として

ともに敬虔なクリスチャンであったルイスとトールキン、そしてともにファンタジー、しかも別世界ものと言われる同じジャンルの作品を書いたのだが、ナルニアではキリスト教的要素は明らかであり、『指輪物語』では隠れている。この違いはどこから来るのだろうか。また、さらなる共通点は何かあるのだろうか。まず、両者自身が述べたことを手がかりにしてみたい。

両者ともにアレゴリ(寓意)を否定している。ルイスはある手紙でアレゴリを「一つの意味だけが込められたもの」(Lewis, 1988: 458)と定義し、トールキンの本はアレゴリではないと述べている。また妖精物語を論じたエッセイでは自作にふれ、「わたしが、子供達にキリスト教の話をしてしようとまず思い、. . . キリスト教の根本的な真理のリストを書き上げ、それを具体的に表現するために『アレゴリ(寓話)』を創り出した、と思っている人もいるらしい。それは全くばかっている」(Lewis, 1982: 46)と述べている。トールキンの方は『指輪物語』の前書きで「『アレゴリ』は作者が意図的に押しつけるもの」で、「わたしは心の底からアレゴリを嫌っている」(Tolkien, 1986: 12)と述べている。二人ともアレゴリを作者の意図によるたった一つの意味、読みどし、自分の作品はそうではないと言っている。また、注目すべきなのは、ルイスは同じ手紙でアレゴリと myth を対比し、myth は「様々な年齢の様々な読者にとって異なった意味が表れてくる物語である」とし、トールキンはやはり前書きでアレゴリと applicability を対比し、後者は「読者の自由に任されるもの」としている。すなわち、読者がそれぞれに意味を読みとることは否定していない。

ひとまず自作とキリスト教との関連に関してまとめると、両者ともに作者としてはキリスト教的意味を作品に込めた唯一の意味として書いたものだということは否定しつつ、読者がキリスト教的意味を読みとることは否定しない、ということになる。次の問題はキリスト教的意味が作品の唯一の意味ではないにしても、作品にキリスト教的要素が含まれているならば、それがどの程度意図的なものなのか、ということである。

ルイスは先ほどのエッセイの中で、自作に関して、すべては、(キリスト教ではなく)傘を

差したフォーンなどのイメージから始まった、と述べたあとで、何をどう書くかを考えていく際に、キリスト教を堅苦しさから解き放って「想像世界の中に投げ込むことで本来の力を示すことができるのではないかと考え」、それが作品を書いた動機の一つだったと書いている。すなわち、まずあったのはイメージであったにしろ、やはり自覚的に、意図的にキリスト教の要素を用いたわけである。キリスト教要素がかすかにしか見えない【指輪物語】とトールキンの場合はどうであろうか。作品に対するコメントをくれた友人への返信でトールキンはこう述べている。「『指輪物語』はもちろん根本的に宗教的な、そしてカトリック的な作品です。最初は意識していませんでしたが、改訂の際にそのことを意識しました」(Tolkien, 1981: 172)。トールキン自身も作品のキリスト教的性格を認めたわけだが、ルイスとの対比で注目すべき点は、最初は意識していなかったということである。同じ手紙の中で「あなたは私の作品に関していくつかのことをよりはっきりと私に明らかにしてくれました」とある。手紙の相手に明らかにされるまでは自分では気づかなかったのである。さらに、「宗教的要素は...しみこんでいるのです... わたしが意図的、計画的にしたことはほとんどありません」と述べており、自ら意図してキリスト教要素を用いたのではないとしている。

5. 信仰と作品

作品にキリスト教を用いたルイスと、意識せずにしみこんでいたトールキン。それではこの違いはどこから来るのか。その鍵は他ならぬ両者のキリスト教の信仰のあり方自体にあると思われる。インクリングズの集団的伝記の中で二人の信仰についてこう書かれている。トールキンは「全く伝統的なローマ・カトリック」で「sacrament 秘跡がクリスチャン・ライフにお

いて断然重要な部分であると考え、教義の解釈などは重要ではなかった。必要なは欠かさずミサに出席することであり... これら(秘跡)と個人的な祈りが宗教生活の中心だった」。これに対してルイスにとっては「sacrament は信仰の根本ではなかった。長い知的な戦いの末に彼はキリスト教のもとにやってきた。だからキリスト教を知的に正当化する書物に心を傾けたのだ」(Carpenter, 1978: 154)。同じく敬虔なクリスチャンだが、トールキンの方は秘跡を守ることが一義的である。これは幼い頃から身に付いた素朴な信仰という言い方ができるのではないか。先ほどの手紙の、自分が意図的、計画的にしたことはない、につづけて「私は自分にすべてを教え、はぐくんでくれた信仰の中で(8歳の時から)育てられたことに感謝すべきでしょう」とある。作品にしみこんでいるキリスト教的要素は幼い頃からの信仰によるものということになる。なお、トールキンのカトリック信仰は少年時代に亡くした母への追慕と結びつき強固なものとなったというのは定説である。たしかに幼い頃から信仰が身に付いていたのである。

トールキンの信仰のあり方から出てくるもう一つの点は、ミサの参加にしろ、個人の祈りにしろ自分がすることであって、他人に勧めるということは(あったにしても)本質的に重要とはいえないということである。この点がルイスとの重要な対比点となる。ルイスの信仰は幼い頃から身に付いたものではない。現代でももっとも有名なキリスト教への回心者の一人である彼は、Carpenterの言うとおり長い知的な戦いの末に「降伏」して無神論者からクリスチャンになったのだった。すなわち彼の信仰は身に付いたのではない、いわば身につけた自覚的なものだった。そして回心を経験したのとしてかつての自分の立場にいるような人々をキリスト教に向けさせる、クリスチャン・アポロジスト

(キリスト教弁証家)として活躍するようになった。前半生、クリスチャンになるまでを描いた自伝『喜びのおとずれ』のラストで、幼い頃から経験してきたうずくような「喜び」が、クリスチャンになってからあまり重要ではなくなったと述べ、その「喜び」を道しるべにたとえている。道が分からないときは道しるべは重要だったが今は「聖地エルサレムを目指す」道を歩いている(ルイス、1978:300-1)。つまり、喜びが指し示す本体、喜びのもとにあるもの、すなわちキリスト教信仰を見いだした、ということである。この喜びの源を人々に伝えたいということから、キリスト教の啓蒙書を数多く表し、また、ナルニア国物語でもアスランの存在を中心とした救いの明さを描いたのではないだろうか。

6. トールキンと北欧神話

ここで今一度トールキンの作品世界を検討してみたい。トールキンには信仰とはまた別のレベルの大きな問題があった。若い頃から、ギリシャ、ケルト、北欧に匹敵するような民族神話がイングランドにはないことを残念に思い、自らがイングランドの民族神話を創り上げたいという壮大な夢を抱いていた。しかも、その夢を個人の作品としては限界に近いほどスケールの大きな神話体系『シルマリリオン』として具体化していった。

さて、彼は北欧神話に特に強い愛着を抱いており、作品世界を構築する際にもその大きな影響を受けた。北欧神話においても壮大な善と悪との戦いがあり、巨人族と神々の最後の戦いでは主神トール、オーディンも含めて神々の側も滅びてしまう。トールキンはとりわけ、神話に表れた悲壮感、特に、強大な敵に対する絶望的な戦いというテーマに惹かれた。しかしこのテーマは「絶対的な力を持つ至高の善なる唯一神」の存在とは相容れないものである。そして

事実作品世界において、至高神エルーは創世神話には登場するものの中つ国を作ったのはヴァラールでありエルーは中つ国には直接は出てこない。また、ヴァラールもきわめてまれにしか、又は間接的にしか中つ国とは関わらない。『シルマリリオン』の大部分を占めるのは「クエンタ・シルマリリオン」で、これは強大な悪の力モルゴスに対する長い、絶望的な戦いを描いた物語である。最終的にはモルゴスは滅ぼされるのだが、それまでは、善の側の人間、エルフたちにとって、つかの間の例外を除いてほとんどが敗北と悲劇の連続である。すでに述べたように『指輪物語』においても悪の力の方が強いのであり、「クエンタ・シルマリリオン」ほどではないにしても悲壮感が色濃く漂っている。つまり、世界観、作品世界の枠組みとしては善なる神はおかれていたのだがストーリーには直接関わってこない。先ほどキリスト教的要素はしみこんではいるが意図的に用いたのではないと述べたが、さらに言えば、北欧神話的作品世界を指向したトールキンは、ストーリー展開上は、大いなる善の力というキリスト教的要素をあえて意図的に避けた、はずした、ということではないだろうか。これと正反対なのが、ストーリー内で善の側の中心人物としてはたらき、絶対的な力を持ち善の側を勝利へと、あるいはそれ以外にも様々のことがナルニアの住民にとってうまくいくようにと導いて行くアスランであり、ここにもナルニアと中つ国、ルイスとトールキンの対比が見られる。

7. さいごに

長年親しい関係にあった二人だが、晩年は疎遠になった。様々な理由が考えられているが、本稿と関連するもののみを挙げておく。ルイスの回心にトールキンが大きな影響を与えたのはよく知られているが、トールキンの期待とは異なり、ルイスは国教会に入った。先に述べたトール

ルキンの母に対する思いとローマ・カトリックの信仰の結びつきは、さらに、国教会に対する反感とも結びついていた。蜜月の時代はあまり気にならなかった教派の相違が徐々に微妙な亀裂になっていったことも考えられよう。

また、ルイスはこれも先述の通り、クリスチャン・アポロジストとして名声を博したのだが、いわば先輩クリスチャンであるトールキンはこれに対して、やはり微妙な反感を抱いていたということも言われている。これは、作中でキリスト教を用いるかどうかという点と関わることであり、さらには両者の創作理論の違いとも結びつくものである。ルイスがキリスト教を別世界に組み込み、この世と別世界を結びつけたのに対し、トールキンはファンタジーの創作は「準創造」であるとし別世界の自律性を強調した。さらにこれは、子供をファンタジーの主な読者と想定するルイスと、ファンタジーをよりシリアスなものとして捉え、むしろ大人を読者と想定するトールキンの違いへとつながっていった。なお、トールキンのこの考えは、実作によって理論を修正していったものとも考えられる。1937年の『ホビット』は子供向けであり、1954-5の『指輪物語』は明らかにそれよりターゲット年齢が上である。またトールキンが『指輪物語』とほぼ同時期に出版されたナルニア国物語を、子供っぽい、シリアスでないとして全く評価しなかったのもよく知られた事実である。ちなみにルイスは『指輪物語』を高く評価し、またトールキンはルイスの成人向け神学SF三部作を高く評価していたのは興味深い。

疎遠にはなったが、両者の強い結びつきもまた否定することはできない。それぞれ作品において違った表れ方をしたが、ともにキリスト教信仰とファンタジー文学が深いところで結びついていた。考え方も文学的な好みも非常に近いものがあつた。長年の親しい交流の成果とも言える『指輪物語』と『ナルニア国物語』は現代

イギリスファンタジーにそびえ立つ巨峰である。ルイスの死後トールキンは自分の子供への手紙の中でこう述べている。「十年前から親友ではなくなっていたが」我々はお互いに多くを負っていた。我々の深い親愛のきずなは消えることがなかった」(Carpenter, 1978: 252)。

付記

・本稿は、日本キリスト教文学会北海道支部2001年度秋期研究大会口頭発表「C. S. ルイスとJ. R. R. トールキン——信仰と作品」をもとに構成したものである。

・本文中の引用の訳は、訳者名がある場合以外は筆者訳

参考文献

- 赤井敏夫、『トールキン神話の世界』、人文書院、1994
- Humphrey Carpenter, *Tolkien*, Houghton Mifflin, 1977
- , *The Inklings*, Harper Collins, 1978
- グレンベック(山室静訳)、『北欧神話と伝説』、新潮社、1971
- Mark Hillegas, ed., *Shadows of Imagination*, Southern Illinois UP, 1979
- 本多英明、『トールキンとC. S. ルイス』、笠間書院、1985
- 今橋朗・徳善義和、『よくわかるキリスト教の教派』、キリスト新聞社、1996
- C.S.Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*, Macmillan, 1950
- , *Prince Caspian*, Macmillan, 1951
- , *The Voyage of the "Dawn Treader"*, Macmillan, 1952
- , *The Silver Chair*, Macmillan, 1953
- , *The Horse and His Boy*, Macmillan, 1954
- , *The Magician's Nephew*, Macmillan, 1955
- , *The Last Battle*, Macmillan, 1956

- (C. S. ルイス (瀬田貞二訳)、『ナルニア国ものがたり』(全7巻)、岩波書店、1966)
- , *Surprised by Joy*. Harcourt, Brace & World, 1956
- (C. S. ルイス (早乙女忠・中村邦生訳)、『喜びのおとずれ』、富士房、1978)
- , *C.S.Lewis on Stories*, ed.Walter Hooper, Harcourt Brace Jovanovich, 1982
- , *Letters of C.S.Lewis*, ed.Walter Hooper, Harcourt Brace & Company, 1988
- Richard L.Purtill, *J.R.R.Tolkien: Myth, Morality and Religion*, Harper & Row, 1984
- 竹野一雄、『C. S. ルイスの世界』、彩流社、1999
- 棚瀬江里哉、『児童文学に見るアメリカとイギリス』【北星学園女子短期大学紀要】30: 25-34, 1994
- J.R.R.Tolkien, *The Hobbit*. revised ed., Ballantine Books, 1966
- , *The Lord of the Rings*, revised ed. in three volumes. Vol.I. *The Fellowship of the Ring*; Vol.II. *The Two Towers*; Vol.III. *The Return of the King*. Allen and Unwin, 1986
- (J. R. R. トールキン (瀬田貞二訳)、『指輪物語』(全3巻、6分冊)、評論社、1974)
- , *The Silmarillion*, ed.Christopher Tolkien, Allen and Unwin, 1974
- , *Tree and Leaf*. Allen and Unwin, 1964
- (J. R. R. トールキン (猪熊葉子訳)、『ファンタジーの世界』、福音館、1973)
- , *The Letters of J.R.R.Tolkien*, ed. Humphrey Carpenter, Allen and Unwin, 1981
- 柳生直行、『お伽の国の神学』、新教出版社、1984
- 山形和美(編)、『C. S. ルイスの世界』、こびあん書房、1983
- 山形和美・竹野一雄(編)、『C. S. ルイス「ナルニア国年代記」読本』、国研出版、1995